

# 観光文化

Tourism & Culture

VOL.

181

2007 January

財団法人日本交通公社

## 特集◎ 地元力 — 地域を支えるその実力と可能性

### ◆巻頭言

地元力 茶谷幸治……①

### ◆特集

- 地元力と観光振興 下平尾 勲……②
- 村上町屋再生の軌跡  
— その歩みと地域活性化の挑戦 吉川真嗣……⑥
- 取手アートプロジェクト (TAP)  
— アートで引き出す・アートを支える「地元力」 渡辺好明……⑩
- 文化財と博物館と観光と 三輪嘉六……⑭

### ◆連載

I あの町この町 第19回

道徳門と経済門 — 静岡県・掛川市 池内 紀……⑱

II 岩倉使節団に嵌まって30年 第4回

次々と著作、そして「国際シンポジウム」の開催 泉 三郎……㉔

III ホスピタリティの手触り 40

「ハウ・アー・ユー」の文化 山口由美……㉖

### ◆視点

- ミャオ族の村で学んだこと  
— コミュニティに根ざした観光のあり方とは 黒須宏志……㉘

◆新着図書紹介……㉚



## — 豪雪の村・雪おろし祭り —

### 新潟・入広瀬

深々と降り積もる白銀の世界は、まさにモノトーンの幻想的映像を醸し出す。

豪雪の村として知られる新潟県入広瀬村（現・魚沼市）は最近、暖冬の影響もあり降雪は少なくなってきたが、私が訪れた一五年ほど前までは家がすっぽりと包み込まれるほどの大雪に見舞われていたという。地元民が「メートルくらいは降ったものだ」とよく語った。

豪雪の村を撮影しようと現地入りすると、東京・江東区の小学生たちが冬期体験研修で「雪おろし祭り」に参加していて、賑やかな笑い声心地よく響きわたっていた。昼間は雪おろし作業に汗を流し、夜はドンド焼き作業に大はしゃぎであった。日本各地の自治体が過疎化現象に苦慮する中、その対策の一環として豪雪を逆手に取り、都市児童たちの雪国生活体験を通じて田舎の子供たちと仲良く交流する。そんな風景には清々しさを感じる。

入広瀬では現在も形を変えた冬期体験学習が続いている。こうした情操教育は人間形成に大きく貢献することだろう。

（写真・文 樋口健一）

## 巻頭言

「地元」には不思議な行動力があつた。鎮守社の御輿を担いだり、巡礼者をご接待したり、朽ちた木橋を架け替えたり、ときには一揆を決起した。

昨年、春から秋まで実施された「長崎さるく博」は、まちをぶらぶら歩く（長崎言葉で「さるく」という、ただそれだけの博覧会だった）が七〇〇万人もの人々が長崎を歩いた。地元の人々が率先して案内したり、まちを挙げてご接待したのが喜ばれたらしい。

長崎では地元民をジゲモンといい、そのなかにノボセモンという血気盛んなリーダーが何人もいて、いまでも地元力を發揮している。旧正月のランタン祭りから重陽のおくんちに至るまで、まちなかの大小の行事はジゲモンがやり、ノボセモンが引っ張っている。「まち歩き」もそのようにやった。

「さるく博」では一〇〇名近いノボセモン（市民プロデューサーと呼んだ）が結集し、四〇〇名の案内役（ガイド）が四七〇〇回のツアーを引き受け、市民劇団がまちなかに繰り出して演技を披露し、商店は来訪者に「さるきよつとですか」と声をかけ、市民は接待所を設けて湯茶をふるまい、総数延べ三万人の地元力がこの

## 地元力

イベント・プロデューサー 茶谷 幸治

博覧会を成功させた。

地元力は、土地に沁み込んだ先人たちの気魂が磁力を發し、ジゲモンがそれに感応して生じるのである。その地に腹ばいになったり、自分の足で歩きまわると強く感応するらしい。その所為か、「さるく博」で自分のまちを歩きまわって、長崎の地に感応して地元力を得たジゲモンがわんさと増えた。長崎には、いま、地元力の分厚い層ができています。ジゲモンのほかにも長崎に十数回通って歩きまわり、長崎に感応してしまったヨソモンも数多く現れた。地元力の他国応援団である。

近頃は、都市に高層ビルが建ち、道路がアスファルトに蔽われて、人々は土地の磁力に感応しにくくなっている。いままで都市の近代化は地元力を無視することと促進されてきた。多様性の上に成り立っている地元力は非効率な存在なのだ。しかし、地元力が失われると、まちは行動力を失くして急速に衰微する。この事態はすでに多くの都市で進行している。

これをなんとか食い止めるには「まち歩き」が有効だと、わかってきた。  
(ちゃたに こうじ)

# 地元力

## 地域を支えるその実力と可能性

全国各地で観光振興の取り組みが展開されているが、地域内外の人たちの支持を得ながら、まちが持続的に発展するためには「地元力」が欠かせないといわれる。そもそも地元力とは何なのか。いかに力を引き出し、それをどのように発揮するのか。今号は、地域を支える原動力「地元力」に焦点をあててみる。

特集 1

## 地元力と観光振興

福島学院大学  
短期大学部情報ビジネス科教授

下平尾 勲

地元力と観光については、地元力を向上させて観光振興を図る道と観光振興のために地元力を展開しようとする方法との二つがある。

最近では地元力の向上に力点がおかれ、観光の振興を商業、農業やサービスの振興と同じく一つの結果としてとらえる施策が台頭してきた。観光だけ、農業や商業だけの振興には限界があり、地元ぐるみでそれぞれの産業のうちすぐれていることを発見し、それらを横に連携させる運動やご当地

検定が活発化している（注1）。地元力を向上させるために、産業界、行政、民間組織、大学などいわゆる産官民学連携が目立つのである（注2）。

地元力という場合、そこには四つの内容がある。一つめは、将来に対して夢と楽しさを共有できる問題を提起し、人々の意識改革と実践力の向上を図ること（実践力と自主独立の精神の涵養）。二つめは、地元の良いことや資源を学習し、経済力を高めること（資源の発見と活用）。三つめは、人々の考

え方を豊かにし、地元自信と誇りを持つて実践する人材が育つこと（人材の育成）。四つめは、実践のために組織をつくり、学習調査し、PRし、地元内外の人たちの支持を得ながら持続的な発展をめざすことである（推進体制）。以上の総合的な力を地元力という。四つの課題に即して少し考えてみよう。

### 将来に向けて夢を語り、実践しよう

夢を語り歴史を省みて新しい条件への対応や新技術の導入を図るため、楽しくて夢



のある企画を工夫することが大切である。地域の人たちの心情を巧みにつかむ簡単で分かりやすいビジョンをかかげ、みんなよく相談し、決め、実践していけば、多くの人たちの参加と協力を得ることができる。

地域経済を支えてきた地場産業、誘致企業、建設業が衰退していくと、悪い面ばかりが目立つ。地元の良いとか、すばらしい経営を行っている企業から学ぼうという姿勢がうすれてくる。「どうせ駄目だ」「人がいない」「やる気がない」といつていると、それ以上にはすすまない。地元が良いところが多い、交通条件は良くなっている、実にすばらしい企業がある、地元にはまだまだ消費者がいる。すぐれている面に目を向けると、それをどのように生かすか、すぐれた地域や企業から学び、それを地元で実践していこうということになる。

市場調査と販路拡大、地産地消、農産物直売場、観光案内人など新しい取り組みが登場する。むずかしいかどうかではなく、やる必要があるかどうかから出発することだ。ささやかなことでも、地域ナンバーワンになれば、人は評価するし、ささやかな努力も数年間続けていると、立派な結果になる。

### 地元の資源を活用しよう

人が育ったから問題が解決されるのではなく、厳しい問題の解決の中ですぐれた人材が育つのである。夢を語り地元の掘りおこしという実践は人材を育成する良い土壌である。

地元にはすぐれた自然や文化、歴史があるにもかかわらず、そこに住んでいる人にとってはありがたいという意識が少ない。日常生活の中では当然のこととして受けとめられ、別段めずらしいことではないからである。

私は、福島市に住んでいるが、果物や温泉や自然の豊かさには感心している。地元の人にとっては、野菜や果物は昔からあったことだし、スカイラインや温泉も当然のこととして受けとめている。果物についても、さくらんぼからはじまって、桃のあかつき、ゆうぞら、川中島がとれ、八月にはぶどうの高尾や巨峰が出まわり、九月になると、なし、柿のほかは、つがる、陽光、ふじといういろいろの季節を迎える。新鮮な果物だけでなく果物の花を眺めて感激しているのは他所から来た人である。外部の人が評価してはじめて地元の人が気付くことが多い(注3)。

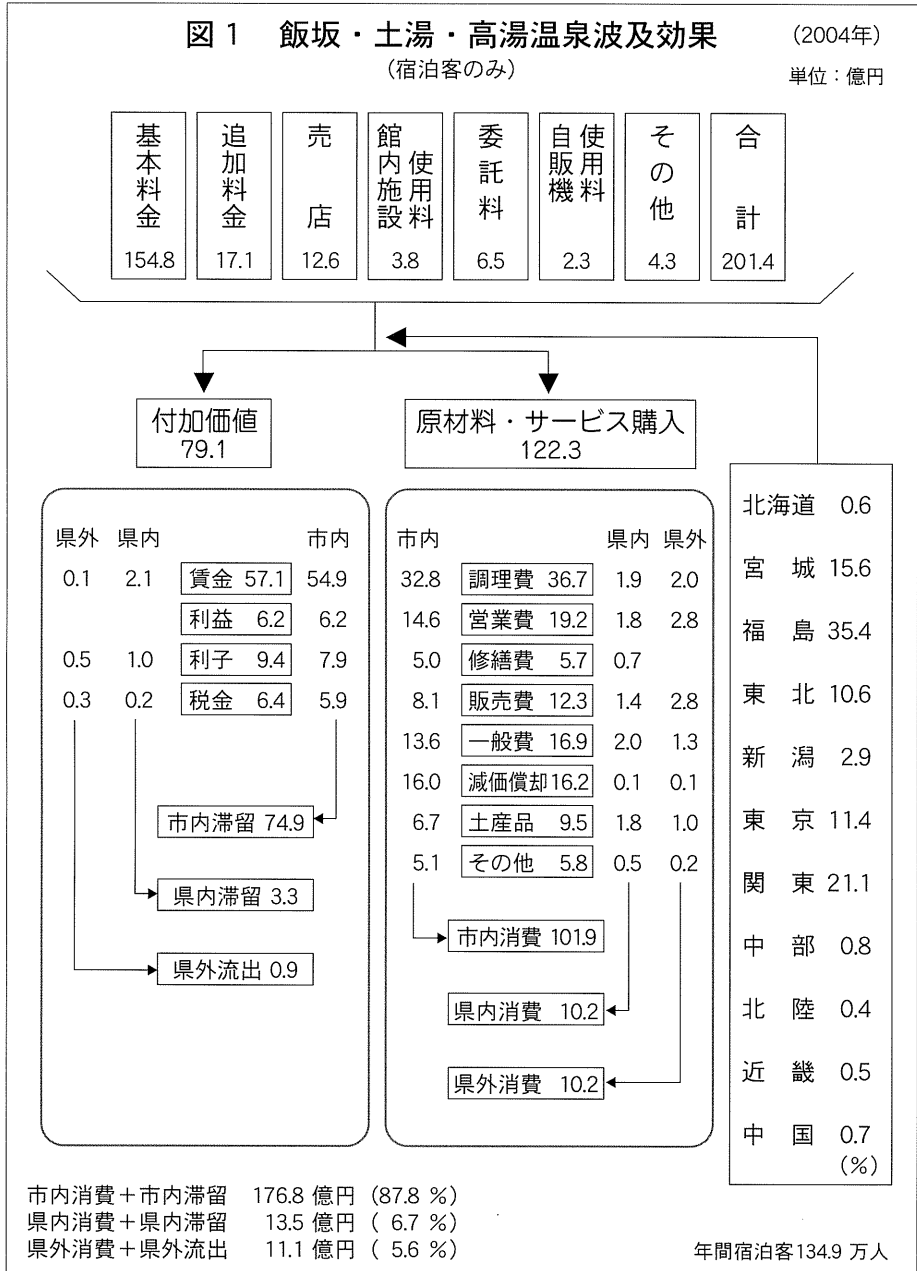
福島市には飯坂、土湯、高湯という三つの立派な温泉地がある。いつでも行けるから地元の人にとっては三つの温泉地の良さやありがたみは少ないように思われる。市民の宿泊者は全体の一五パーセント程度であり、それも十二月の忘年会と一月の新年会に集中している。三温泉地全体では、二〇〇四年には約一三五万人の宿泊者があり、宿泊者が旅館ホテルに支払う額は二〇一億円に達する。それは、基本料金、追加料金、売店収入、自動販売機使用料などであり、日帰りの客や旅館ホテル外の種々の支出は含まれていない。福島市の農業粗生産額一九六億円(二〇〇三年)であるから、売上高はそれよりも多いのである。

しかも原材料、修繕費、什器等の仕入れ先はもとより付加価値(賃金、利子、税金、利益等)の支払い先のうち約八八パーセントは市内であるから、地元に対する経済的波及効果は著しく大きい。三温泉地の旅館ホテルの利益額よりも利子、税金の額の方が多く、収入のほとんどは、地元雇用者への賃金や調理費等の支払いである(図1)。三温泉地の振興は地元にとって重要な基幹産業であるにもかかわらず、そうした意識

図1 飯坂・土湯・高湯温泉波及効果 (宿泊客のみ)

(2004年)

単位：億円



も乏しく、「宿泊客二〇〇万人構想」といった政策もない。地元の有力資源の活用を考  
えるべきであろう。

実践を通じた人材の育成

「まちづくり運動や産業おこし運動がはじ

し、自信や誇りを持ってさらに知恵を出してやっていくことが多くなる。まちが明る  
くなってきたという。

まあって何が良かったですか」と行政の長にたずねたことがある。町の人口は減ったかも知れないが、人材が育ったという。構想を持ち実践していくと、一丸となって協力し、情熱をそそいで実践していく地域の人たちが増えたという。外部から有名な先生や研究者が訪れてきて調査や研究を行ったり、地元の人たちと懇談してくれている。住民にとっては、励みになる

ずっと以前に、ある山村にスキー場ができたので、NHKの人たちと一緒に現地へヒアリングに行ったことがある。スキー場でリフト券を切っている「おじいさん」に「ここにスキー場ができて何が良かったですか」とたずねた。「働く場所ができて良かった」という答えが帰ってくるだろうと予想していたが、そうではなく、「そりゃ人の声のするのが一番だ。みんな協力して良いまちをつくらうという意欲がわいてきたことだ」というのであった。地域づくりにかける「志の高い」人材がいかに大切かを実感したのである。

## 実践するための組織をつくらう

地元のことについて何とかしないとけない。「余っていてもつたないもの」「遊んでいてもつたないもの」があり、何とか活用できないかと考えている人が多い。共通の問題意識を持った人たちの集まりができる。勉強会、視察、交流会、フォーラム、イベントの開催などそれほど予算がかからないが、こうした一時的な取り組みを継続させていくことが大切である。なぜ良いかというと、問題意識のある人た

ちが共通の目標をかけた動き出すようになるからである。ささやかな運動が雰囲気をつくり、学習する体制を築いていき、情報の交換や、人脈の形成と人材の発掘を促し、大きな力となっていく。組織をつくるうえで重要なことは、志の高い人材の確保、事務局体制、財源（二〇〇〇万円程度）の確保につぎるのである。

以上四つの条件を揃えることができるならば、地元力は高まり、観光資源の活用、地域づくりや自然を生かした観光も発展していくことであろう。（しもひらお いさお）

注1. ご当地検定が最近一つのブームをつくり出しているが、商工会議所主催だけでも、まもなく五〇近くとなり、それにNPO法人などを含めると七〇カ所の都市で開かれていることとなる。地元の大学、関連団体やマスコミなどと連携し、事前学習を充実し、認定に権威を与え、仕事のキャリアアップをめざすものが多い。

注2. 福島市においては商工会議所会頭が提唱し、県、市、地元四大学、マスコミ、青年会議所、商店街連合会が参

加・協力し、「ふくしまふれあいカレッジ」が二〇〇五年四月に発足した。教養学部と専門学部に分け、教養学部講座は、三年間に受講生一万人を目標とした。教養学部講座は、一・歴史・史跡、二・自然・環境、三・花・実、四・祭り・文化、五・温泉・観光に分かれるが、地元の学習や理解を深め、横の連携を図り、もてなしの心を養うこととなった（拙著『地元学のすすめ』新評論、二〇〇六年参照）。

注3. 福島市の花見山は写真家の秋山庄太郎さんの功績に負うところが大きい。「私は春になると毎年京都に出かけた。福島市に桃源郷があると聞き出かけてみると、まことにすばらしいものであった」。阿部一郎さん所有の花見山が公園として無料開放されたことその他に、花見山の写真が全国的に話題になってはじめて地元の人たちも花見山に注目することとなった。各地の歴史や建造物のすばらしさの評価も同様に、外部の人たちによって発見され、支援されているケースが多いのである。

# 村上町屋再生の軌跡——その歩みと地域活性化の挑戦

味匠 吉川 専務取締役  
村上町屋商人会 会長

吉川 真嗣

## まちづくりのきっかけ

新潟県最北の城下町、村上。人口三万。近くに瀬波温泉を持つこの町はこの数年で「町屋」の城下町として一躍注目を集めるようになり、全国からの来訪者がある町へと変わってきた。このような変化は自然に起こったものでもなく、また「町を元気にしたい」というような一般的な町おこしでもない。突然浮上した大規模な「近代化計画」に対し、心ある市民がふるさとを守るため、必死の覚悟で町の破壊を食い止めようと立ち上がったことに端を発した。

村上には武家屋敷、町屋、寺町、城（跡）という城下町としての四大要素が残っており、全国的にも希少な城下町であると高い評価を受けていた。にもかかわらず、地元ではそのような価値認識はさわめて低かった。また商

店街は、活気を失っており、観光からも縁遠く、何をやっても駄目といわれていた。そんな折に、町屋の多く残る商店街（旧町人町）に道路拡幅を伴う大規模な近代化計画の話が持ち上がったのだ。平成九年のことであった。

その時、「町を整備しきれいにすることが、本当にこの町の繁栄につながるのか」と疑問を抱いた。すぐに全国の町を見て歩いたが、驚いたことに道路を拡幅し整備した商店街で栄えたところは一つもない。「拡幅による衰退」これが現実だった。

「道路を拡幅したら大変なことになる。見直しが必要だ」と訴えたが地元には聞き入れてもらうことはできず、近代化ありきで話は進んでいく。なんとかしなければいけないと思う中でたどり着いた手段は、この町人町に残る古い町屋を活かすことで町に賑わいを取り戻すことだった。「古い伝統的な町屋があるか

らこそこの町は繁栄する、これを壊すのではなく残し活かしていこう」と市民の意識が変われば、町の進む方向が修正されるはずと考えたのである。町屋を活かし、町を元気にし、その活気ある姿を目に見える形で市民と行政に示すことが、町を近代化から守る唯一の手段ではないか。こうして町の明日がかかったこのような事態の中で、心ある市民たちによって町屋を活かす取り組みは開始された。

## 町屋の公開

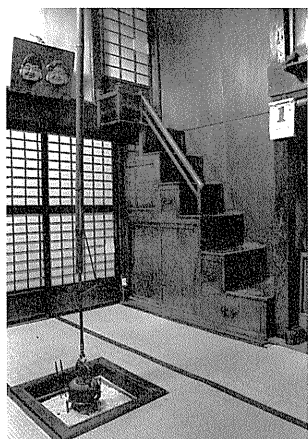
村上の町屋とは間口が狭く奥行きが長い伝統的な家屋のことである。外観こそ近代化の波を受けているが、一歩店の奥に進むと、イロリや梁、大黒柱に神棚、仏壇、豪快な吹き抜けの造りなど、江戸や明治の町屋が現われる。住んでいる我々にとってはごく見慣れた町屋も、都会の人が見ればタイ

ムスリップしたような驚くべき光景に見える。この町屋の生活空間である内部こそが村上の宝だと確信した。本来、町屋の中は生活の空間であり、お客に見せるような場所ではない。しかし、結果二〇軒ほどの仲間が賛同し、この生活空間を公開する取り組みが始まったのである。観光施設ではない生活空間を、一年を通して無料で公開するという、それまで全国で例のない取り組みだ。

こうして平成十年の夏、町屋のマップを作り、村上町屋商人会（かみきと）による「町屋の公開」が始まった。この活動により、マップを片手に歩く人が増え始め、町には明らかに変化が生まれてきた。

## 町屋の人形さま巡り

「町屋の公開」は町に新しい風を吹かせ、「町



町屋の公開（通年、12軒が公開）

屋旋風を巻き起こした取り組みではあるが、町の活性化にはまだまだ力不足だった。そこで平成十二年、町屋の中にその家に伝わる雛人形をはじめ武者人形、土人形、市松人形など江戸から現代までのさまざまな人形さまを展示披露する「町屋の人形さま巡り」を企画した。六〇軒ほどの町屋で、すべて無料で公開するという画期的なイベントである。

町屋の生活空間に展示された家伝の人形さまを無料で見学してもらおうこの取り組みは、開幕するやいなや話題が話題を呼び、口



町屋の人形さま巡り（毎年3月1日から4月3日までの34日間開催）

コミでも急激に広まった。NHKの全国放送や新聞の全国紙で紹介されたことも拍車をかけ、第一回から北は北海道、南は九州とまさに全国から大勢の人たちが村上の町に訪れた。初回から約一カ月の開催期間に三万人もの人が訪れ、町にとってはまさに大事件が起こったような騒ぎであった。それまで町屋とは単に古い家でしかなく恥としか思っていなかった市民が多かった中で、来る人、来る人に町屋が素晴らしいと褒められたために、いつしか町屋を自慢げ



町屋の屏風まつり（毎年9月10日から30日までの21日間開催）

に説明するようになり、町屋を誇りに思うようになった。地域への誇りが芽生えたことは得がたい喜びであった。

## 町屋の屏風まつり

「人形さま巡り」が大変な話題となり、地元は活気と笑顔に包まれた。毎年開催するものではあるが、一年待つのは長いもので、この活気を持続するためには秋にも核となる催しが必要と考えた。そこで平成十三年、秋の企画として「町屋の屏風まつり」を企画した。

もともと絢爛豪華な山車を出す四〇〇年の歴史を誇る村上大祭の日には、お祭りのしつらえとして道路に面したミセの間に屏風を立てる風習があり、どの家も屏風を立てることから、その昔は別名「屏風祭り」だと言われてきた。しかし生活様式が変わり、近年めっきり屏風が出されなくなってしまっていた。「町屋の屏風まつり」は、その風習をひも解いて形式を変えて、家伝の屏風を六〇〜七〇軒の個々の町屋の中で公開しようというもの。金屏風に、書の屏風、混ぜ張り屏風に枕屏風などさまざまな屏風が出された。屏風には生け花が添えられ、重箱、大皿、漆器などお道具や調度品まで飾られ、人形さま巡りとはま

違った格調高い雰囲気を漂わせ、城下町の町人文化を伝えるみごとな催しとなった。

「春の人形」と「秋の屏風」と年に二回の核となる催しができ、城下町としての村上の知名度は全国的にも広まっていった。この「町屋」も「人形」も「屏風」も今まで見向きもされず眠っていただけの存在で、言うなれば埋もれていた町の宝を掘り起こし、「今あるものに光を当て、誇りを持って披露する」取り組みだった。全国には素晴らしい外観の町並みを持つ町は数あるが、町屋の生活空間をこれだけの規模で見せる町は他にはないと自負している。これらの村上町屋商人会の取り組みは、平成十六年に「地づくりに総務大臣表彰」を受けている。

## 黒塀プロジェクト

「人形」と「屏風」による町おこしを立ち上げた後、新しい展開が始まった。取り壊しの危機にあった古民家を、買い取り保存したことをきっかけに、他にも文化財の建造物が集まる小路（安善小路）をさらに美しくしようと景観形成の取り組みが始まったのだ。平成十四年、この地区の住民が組織を立ち上げ「黒塀プロジェクト」を開始。味気



黒塀プロジェクト（黒塀1枚1000円運動で320mが完成）

ないブロック塀になってしまった小路の塀を昔ながらの黒塀に復活させようというもので、市民の力による黒塀作りが始まった。資金は「黒塀一枚一〇〇〇円運動」を行なうことで寄付を集め、黒塀作りの作業は子供からお年寄りまで参加して市民の手で作っていくというものである。既存のブロック塀を壊さず、その上に板を張り付ける簡易工法なのだが景観はがらりと変わる。現在三二〇メートルの黒塀が完成している。このように市民により始まった「町おこし」が、市民による本格的な「町づくり」へと変化を見せてきた。





町屋の外観再生プロジェクト（現在6軒の町屋が再生）

## 町屋の外観再生プロジェクト

町屋の内部を活かした取り組みでは優れた取り組みをしている村上も、町屋の外観に関してはアーケードやサッシ、トタンなどで覆われていてその魅力が充分表現されていない。外観を昔ながらの格子や壁、木製の硝子戸に変えて町屋の景観を整えることができれば村上は中も外も充実し、さらに魅力的な城下町になる。このような思いで平成十

六年、黒堀プロジェクトに引き続き、市民有志で新たな組織を立ち上げ、「町屋の外観再生プロジェクト」を開始。全国の人に呼びかけて基金を作り、町屋の外観を再生する店に補助金をだすという、市民プロジェクトとしては全国初の取り組みである。

改修は外観だけなので低経費で済み、一方町並みの趣きは大きく変わる。本来は行政がやるべき仕事ではあるが、頼んでもやってくれるものではない。だから市民の心意気でやるべきだと実行に踏み切ったのである。現在六軒の町屋の外観を再生している。町屋の外観が再生されていくことで、村上は中も外も素晴らしい全国でも屈指の城下町になっていく。このように村上は一年を通して活気あふれる町にすべく、黒堀作りや町屋の外観再生を進めることにより、城下町らしい風情を堪能できる美しい景観作りの取り組みを進めている。

## 振り返って

近代化問題に端を発し「町屋を守れ」と始まった一連の取り組みは、地域の文化を見直す大きなきっかけとなり、地域の宝を発掘した。日陰の存在だった町屋が今、市民の誇り

に変わり、同時に地域活性化の起爆剤となった。大勢の人が訪れたことで、市民が我が町の文化的価値に気づき、誇りを持ち始めたことは大きな収穫だった。また訪れた人には、生活文化を披露し、損得抜きでもてなす村上の市民性が感動を与え、今までにない観光だと喜ばれるようになった。文化を通じ、訪れた人に喜ばれ、喜ばれたことが地元の人々の誇りにつながり、交流することではじめて見いだせる価値があり、それが地域再生の大きな力になると実感している。

村上には町づくりを通じて、教えられ、学びながら、着実に次の一步を踏み出しており、確実に成果をあげ前進し続けていると思う。相変わらず近代化を望む人からの強い声があり、また行政には確固たるまちづくりのビジョンが欠けており、懸案の近代化問題もいまだ解決していないが、今までの市民によるまちづくり活動は確実に力を持ち始めている。行政が非協力的であろうがどうであろうが、「わが町は我々市民の心意気で作っていく」という信条のもと、これからも活力があり地域独自の文化が香る誇りある町を作っていくべく一生懸命取り組んでいきたい。（きつかわ しんじ）

# 取手アートプロジェクト (TAP)

——アートで引き出す・アートを支える「地元力」

東京芸術大学先端芸術表現科教授  
取手アートプロジェクト実行委員

渡辺 好明

## 八年目のTAP——終末処理場より

「旧戸頭終末処理場」の焼却炉の煙突頂上には現代美術家ヤノベケンジの作品「フローラ」が据え付けられ、煙突が巨大なラッパと化した。二〇〇六年十一月二十九日夕刻、ファンファーレとともに「フローラ」から無数の風船が空に舞い上がる。その年の取手アートプロジェクトの最後を飾るファイナルイベント「終末スペクタクル」の始まりである。大勢の観客が見守る中、さまざまなパフォーマンスが繰り広げられ、ヤノベワールドともいえるべき「終末スペクタクル」を演出していく…。

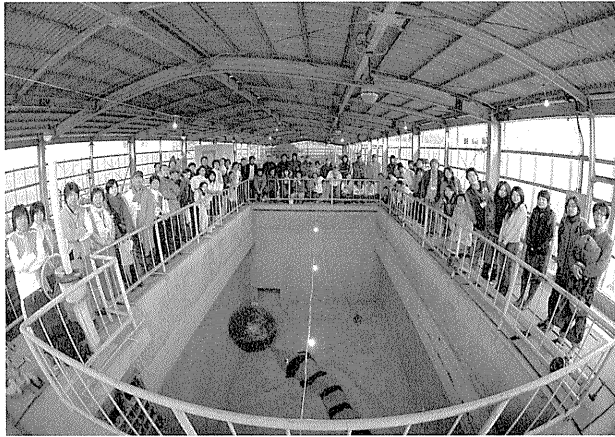
八年目を迎えた取手アートプロジェクト (TAP2006) は、「一人前のいたずら——仕掛けられた取手」と題して、三人の異なったタイプのアーティスト (作曲家の野

村誠、サウンドアーティストの藤本由紀夫、現代美術家のヤノベケンジ) をゲストプロデューサーとして迎えて、全国から作品プランやアイデアを募集した。応募総数二五三件の中からTAP史上最大規模の総勢三九組の企画参加者が公開選考会で決まり、取手市内各所でさまざまな「仕掛け合い」を繰り広げることとなった。野村誠はトレードマークの鍵盤ハーモニカを携え、参加者との掛け合いによるパフォーマンスを市内各所で行い、藤本由紀夫は少数精鋭で洗練されたサウンドアートを設置した。

ヤノベケンジがプロデュースした旧戸頭終末処理場は、三年前に封鎖された汚水処理場である。敷地内には管理棟、浄化水槽、焼却炉など、さまざまな施設が隣接して建てられている。立ち入り禁止のこの場所が、現代美術の展覧会場として甦った。確かに

スケールの大きな魅力的な空間であるが、それを使い切った二十一組の作家のエネルギーと、彼らをまとめあげたヤノベケンジの熱意は特筆に価する。しかし、それを裏方で支えたのが「地元力」にはかならない。

一九九九年のTAP発足時より、東京芸術大学の教員や学生、取手市の担当職員、そして市民の三者が共同でこのプロジェクトを企画・運営してきた。なかでも長年TAPに関わってきた市民スタッフは、それぞれ多彩なキャリアと「地元人」ならではの人脈を持っている。今回、終末処理場の大掃除に際しても、市民スタッフの声がけにより地元町内会・自治会の人たちが多数集まり、大勢のアーティストの宿泊場所の提供や、温かい差し入れ、危険な場所も多い施設での監視や車の誘導も、寒空の下、進んで引き受けてくださった。また会場設営



終末処理場にTAP2006 スタッフ大集合（撮影：齋藤 剛）

のために採算ぬきで電気配線や設営工事、資材提供にご協力いただいた地元企業など、彼らの「地元力」なくしては、このプロジェクトは実現不可能であったと思われる。と同時に、それは地域に根差して展開してきTAP八年間の成果でもあった。

## TAP 始動！ その背景

取手市はJR常磐線で上野から四〇分、茨城県の南端、利根川とその支流である小

貝川の二天河川には生まれた茨城県の玄関口ともいべき人口約十一万の都市である。昭和四十年代半ばから首都圏のベッドタウンとして人口が急増したが、この時期に移住した団塊世代が定年を迎えつつある。一九九〇年、東京芸術大学が第二校地を開設して美術学部の一部を移転して以来、芸術・文化活動に力を入れて「人・自然が輝く文化都市」をめざしている。

一九九九年、東京芸術大学が取手校地に先端芸術表現科を新設したことを機に、同科の提案によりTAPは始まった。きっかけは、取手駅東口区画整備事業に伴い駅前周辺に設置された屋外作品展示スペース「ストリートアートステージ」への作品制作の依頼であった。これを受けて、私は単に作品を設置するのではなく、市内全域で継続的に野外アート展を開催していくことを取手市に対して逆提案したのである。若い作家たちの実践的な作品発表の場となるアートプロジェクトを全国的に発信していくことは、学生たちに刺激を与え、大学と地域、アートの結びつきを深めていくことでもあった。

『人々がそこを訪れ、作品と出会い、そして新たに、この町、風景、生活環境、ア

ト、などについて考える……。そのきっかけをつくることを目的にこのアートプロジェクトは行われます。』（取手リ・サイクリングアートプロジェクト'99公募ポスターより）

駅前の「ストリートアートステージ」四基には、二〇台の放置自転車をカラーリングして設置、会期中には貸し出され市内各所に点在する作品を見て回るためのツールとなった。これらの自転車は、現在でもTAPのシンボルとして市民に親しまれている。

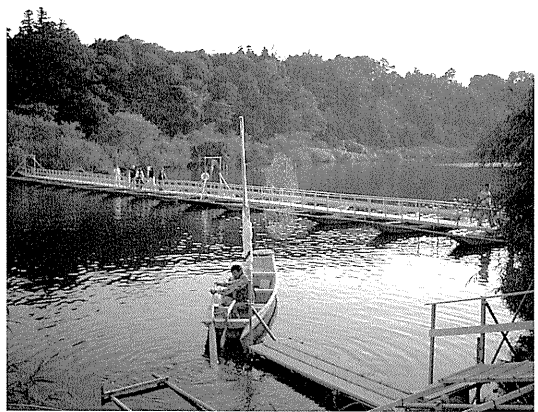
## TAP八年間の推移

### 市民参加と地域文化の再発見

TAP開始当初から市民の参加協力は不可欠であった。市内の文化サークルに呼びかけて市民有志による「取手アートプロジェクト実行委員会」が組織され、初年度は同実行委員会と東京芸術大学美術学部先端芸術表現科との共催で開始された。翌年からは市民が「アート取手」という団体をつくり、大学や行政諸機関などと合わせて「取手アートプロジェクト実行委員会」を編成することで主催者として一本化された（現在の構成：取手市／東京芸術大学／アート取手／取手市教育委員会／取手市商工会



取手駅東口「リ・サイクリングアートパレット」



サツパ舟で古利根沼に架けられた「舟橋」

／財団法人取手市文化事業団／茨城みなみ農業協同組合／取手美術作家展。発足時に参加してくれた市民の多くはその後もスタッフとして残り、今日までTAPを支え続けてくれている。

地元在住の作家たちの存在も大きい。取手市では、以前から地元の作家たちと呼びかけて「取手郷土作家展」を開催していたが、TAP1999では、さまざまなジャンルの地元在住作家のアトリエを公開する「オープンスタジオ」をプログラムに加え、以来、公募による野外アート展と毎年交代で開催してい

る。これにより創作活動の現場を市民が身近に感じて理解が深まるとともに、作家同士のつながりも新たに生まれて、東京芸術大学の卒業生も次第に取手に定住しつつある。

「地元力」を活かした取り組みとして記憶に残るTAP2002「舟プロジェクト」は、河川改修により利根川を隔てて取手市の飛び地となっている小堀地区に残る「古利根沼」に、周辺農家に保管されている多数の「サツパ舟」を借り受けて「舟橋」を架けるといふ壮大なプロジェクトで、地元在住の彫刻家島田忠幸が中心となり多数の

TAP1999「取手のまちにアートプロジェクト始動！」取手駅東口駅前にはカラリング自転車を設置。全国公募によるアート展「取手リ・サイクリングアートプロジェクト」と在住作家のアトリエ公開「オープンスタジオ取手」開催。

TAP2000「家・郊外住宅―家と郊外をめぐる再発見」取手市内の廃屋を作品化。招待作家三名と公募選出作家六組による大掛かりな作品が実現。他に「先端芸術表現科関連プロジェクト」など多彩な内容。

TAP2001「オープンスタジオ取手」通年でレクチャーやシンポジウムを開催。「アーティストインレジデンス」としてニューヨークからリチャード・ノナスを招聘。

TAP2002「Between the river」川に学ぶ利根川河川敷を舞台とした野外アート展に加えて、市民主導で行われた「舟プロジェクト」では古利根沼にサツパ舟をつないだ「舟橋」が架けられた。TAP2003「オープンスタジオ取手―アーティストの仕事場」

「オープンスタジオ」に加えて、地元商店街の空き店舗を利用した「出張スタジオ」を出展。「壁画プロジェクト」としてJR常磐線高架下に巨大壁画を実現。東京芸術大学に新設された音楽環境創造科がTAPに参加。

TAP2004「1/2のゆるやかさ」四名の招待コンペ作家に挑む七組の選出作家。「TAP塾」開始により多数のインターンが企画・運営に加わった。TAP2005「はらっぱは経由で逢いましよう」

旧茨城県学生寮を「TAPヒルズ」と名付け、市民文化活動の紹介やアートカフェ、各種イベントを開催。併せて「TAPトラベル」と称して「オープンスタジオ」他、旧藤代町と合併して拡がった市内全域のアートスポットを巡るツアーを開催。新設の「TAPサテライトギャラリー」では若手作家を中心に毎月企画展を開催。

TAP2006「二人前のいたずら」仕掛けられた取手「街・音・形」をテーマに三人のアーティストをゲストプロデューサーとして迎え、彼らのプロデュースにより総勢三九組の参加者が、市内各所でさまざまな仕掛け合いを繰り広げた。



TAP実施本部での運営会議

新旧市民を巻き込んで実現させた。普段訪れる人も少ない地域と、忘れかけた文化に新たな光をあてるという地元作家だからこそ構想・実現しえた出色の試みであった。

TAP八年間の歩みを簡単にまとめると、右下の通りである。

## TAP塾——「つなぎ手」の育成

TAP開始以来続けている「児童画展」で

は、市内の小学一年生全員がその年のテーマに合わせて描いた絵を会期中に展示、学校への「アーティスト派遣」や子どもの絵に感想を書き送る「お手紙企画」なども加えて、子どもや父兄にもTAPに親しんでもらっている。また、TAP2004から導入された「TAP塾」では、東京芸術大学に新設された音楽環境創造科の熊倉純子助教授が塾長となり、市内外から集まったインターナたちが、TAPの企画・運営を通じて実践的にアートマネジメントを学ぶこととなった。アートと社会との「つなぎ手」となるインターナたちの成長、活躍は目ざましく、TAPにとって欠くことのできない存在となっている。

## 今後の展望——JOBANアートラインと「芸術の杜」構想

「JOBANアートライン」構想は、東京芸術大学のある上野と北千住・取手を結ぶ常磐線を「JOBANアートライン」と名付け、「アート」を軸に沿線のイメージアツプをはかっているというもので、アトやまちづくりについて市民とTAP関係者が自由に話し合う場として設定された「TAPフォーラム2005」で塚本光男取手

市長から初めて表明された。すでに東京芸術大学・JR東日本と沿線自治体がJOBANアートライン協議会を発足させて連携を深めている。

二〇〇六年十一月には、これまでのTAPの活動に対して、国土交通省主催の「地域づくり全国交流会議」において地域づくり表彰「国土交通大臣賞」を受賞した。二〇〇七年は東京芸術大学一二〇周年記念、翌年には茨城県で国民文化祭があり、いずれも取手市においてはTAPを中核とした現代アートの企画を予定している。さらに取手駅西口周辺を中心市街地整備計画では、取手「芸術の杜」構想も打ち出されており、取手市がアートに寄せる期待は高まっている。市内最大の井野団地内にあるショッピングセンターを改修して一棟を若手アーティストのための共同アトリエ「井野アーティストビレッジ」とする計画も進行中で、三〇人もの作家の創作拠点が誕生する。

TAPがアートの力で引き出してきた「地元力」が、アートを支える「地元力」としてもさまざまな場面で、今後ますます試されていくのではないだろうか。

(わたなべ よしあき)

# 文化財と博物館と観光と

九州国立博物館長

三輪 嘉六

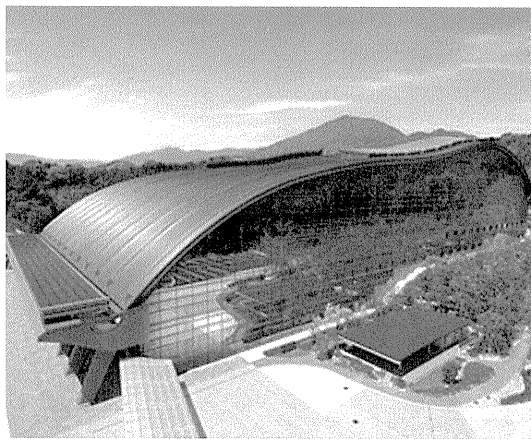
近頃、標題に掲げた三者の関係は、頓とんに密になってきている。しかしこの連携は決して新しいわけではなく、実は古くから人々の意識の中では自然に培われてきた図式である。とくに観光という用語は新しいイメージをもたらしているが、決してそうではなく近代以前からの人の行動現象の一つである。

文化財や博物館は近代以降の欧米的理念の中で生み出されただけに観光とは別の要素、つまり教育とか学習の範囲を意識しがちであった。もちろんそのことは大事であるが文化財世界からみた市民の関心と観光、そして博物館への関わりを少し整理してみよう。

いま博物館は大きく変わろうとしている。これまでの博物館はどちらかといえば「来たい人だけが来る。見たい人だけが来る」。

こんなあり方が一般的であったし、社会的にもそれほど大きな違和感をもって受けとめられてはいなかった。その博物館が大きく変わろうとするのは、平成十三年から実施された独立行政法人化が一つの契機となる。それは博物館が評価を受け、その実績の中で存在感を出していく取り組みが求められてきたからに他ならない。

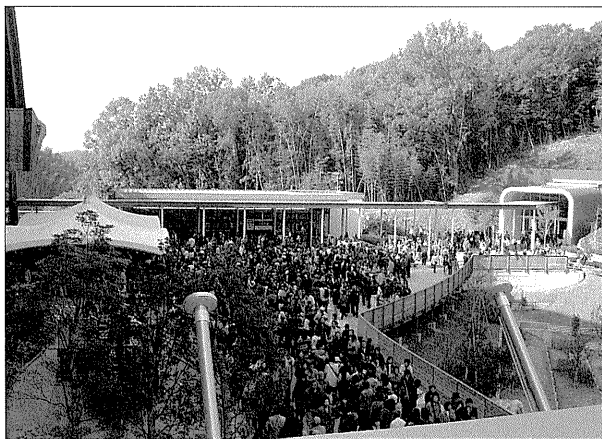
この評価の指標の一つは博物館への来館者数が最も分かりやすく、また一般的になっている。博物館についてその運営や展開を定めている「博物館法」に、博物館の目的は資料の収集、保管、活用、調査、研究を掲げているが、利用者についての規定はない。しかし、いまや当然のごとく来館者の増加が求められ、そのためのさまざま企画や工夫を重ねているのが実情である。わたくしの所属する九州国立博物館は開



ガラス張りの明るい九州国立博物館

館してからちょうど二年三カ月（平成十九年一月中旬現在）、約二六〇万人の入館者があった。博物館が経験したことの無い入館者数である。今後この数をいかに維持し、さらに増加への努力をするか。この取





2005年10月、開館時の混雑ぶり

り組みは今後とも変えることはないし、ただ進展あるのみの意気込みである。この背景は、入館者の増加が地域の活性化や、いわゆる地元力の向上につながり、博物館が市民と一体化しながら地域と共生することを目標とすればするほど、入館者増に向けて熱いまなざしを注がなければならなくなっているからである。

一方、博物館は文化財を保存していくための機能をもっている。博物館、文化財、市

民である入館者の三位一体の構図の中核に文化財が存在し、これ無くしては博物館も成り立たない。この「文化財」は何故保存しなければならないか、博物館の主役でもある文化財を考えると必ず出される疑問である。また各地の遺跡や史跡など観光の大きなターゲットになっている歴史的遺産に対しても同じ疑問が抱かれている。これに応えるのはなかなか至難であるが、わたくし自身は以下のようにまとめている。

人はヒトとして生きていくために不可欠な三つの条件がある。社会的条件、自然的条件と歴史的条件になるが、このうち前者は例えこれが崩壊したとしても再構築することは必ずしも不可能ではない。しかし歴史的条件は、具体的に遺跡や遺構、あるいは作品などの文化財であることを念頭におけば、それらが消失したり、破壊されたりしたとき、再び元に復することはできない。文化財を保存していかなければならない根本的意義はそんなところにある。

また人のつくりあげた文化財は決して偶然のなす術であったり、結果ではない。人々が累々と築き上げてきた生活や基層の営みに発して新しい文化が生まれ、息づいてく

る。人は日進月歩の流れの中にあっても、常に文化的成果や経験を礎として新しい知識や創造物をつくる。つまり、過去の象徴的な存在である文化財はどのような場にあっても次の新しい文化を創造していくうえで欠かせない道標であり、手本である。ここに文化財を保存し継承していく大きな意味合いがあるように思える。ついでに法的な立場に触れると、文化財保護法は「国民共通の財産」として守らなければならない公共の立場を掲げている。

いずれもこうした理念は現代社会になって唱えられたわけではない。明治四年の大政官達として出された「古器旧物保存方ノ布告」は、わが国最初の文化財保存についての制度ともいえるが、ここでは「古今時勢ノ沿革ハ勿論往昔ノ制度文物ヲ考證仕上候要務ニ有之」としている。背景にあるのは明治維新後における欧米文化の謳歌崇拜と、その時代の社会的傾向であった旧物破壊主義の風潮、さらには世を吹きすさんでいた廃仏毀釈の嵐など文化財保存上の危機があった。この制度は文化財が集中している畿内を中心に組織的な文化財所在確認調査を実施する契機をつくることになった。

こうして文化財を保存し、これからの社会の発展に役立てていくような考え方は近代国家への歩みと共に次第に国家的な取り組みへ位置づけられていく。

さて、こうした文化財を観光との関係でみると、これまでは文化財の保存の論理と観光との間に直接的な関係は見いだすことができない。しかし、「観光」の理念にもよるが、わたくしの理解では早くも平安時代の『信貴山縁起絵巻』などにその一端がみられる気がする。第三巻にある奈良に修行に出た弟の命蓮を信濃から訪ねる尼公の苦難の旅は、奈良の東大寺に願をかけ大仏のおつげを得る仏教絵伝であるが、ここにみられる尼公は大和への信仰の旅であり、同時に未知へのときめきの旅であった。

庶民の間でも江戸時代あたりから盛んになってきた神社、仏閣への参拝は、少し物見遊山とは違った意味合いにあるものの今日でいう観光のはしりとみてよいだろう。善光寺詣り、伊勢詣りなどその類であり、伊勢詣りのついでに京・大坂を見物して帰途につくなど、今日の観光への取り組みとあまり大きな距りはみられない。元禄期には

大和法隆寺の銅造夢違観音像が開帳として江戸浅草の回向院でお披露目され、多くの善男善女を集めた記録もあるが、大和から遠く江戸市中まで出向くさまは、まるで今日の観光キャンペーンを彷彿させる。文化財と観光の取り合わせの初期現象といえるが、本質は信仰と自然と人知に触れるモノ珍しさであろう。

文化財の立場で近代の観光をみると、忘れてはならないものに博覧会がある。幕末のパリ万国博覧会や明治六年のウィーン万国博覧会の開催とそれへの参加は、国内的にも大きな刺激をもたらす。明治五年三月の東京湯島でのわが国最初の博覧会は、ウィーンへの出品物の国内披露をかねた勸業博覧会であった。ここでは民業の振興に役立つ工業製品や農業製品の収集に力を入れ、一方では各方面に古器旧物を重点的に収集したいと出品をよびかけている。文化財の出陳への要請である。

これらの展示の総括的な責任者であった町田久成（一八三八〜一九七）は、歴史的な古美術品の収集を行うための舞台としての博覧会を利用した。かれの本質は後の博物館集古館の建設に向けた展覧会でもあつ

たが、明治五年一月の文部省布達で古器旧物の収集、出品のよびかけを行い、殖産興業を計ることとともに文化財についての関心や好奇心を国民の前に提示した。

この時の展示物品の一部は『明治五年博覧会出品目録』や『博覧会図式』（宝来常印刷）にみられるが、これによると「古器物の保存」と「美術の勸奨」を軸にして物品収集に力を入れている。この中で一般大衆向けの最大の目玉は名古屋城の金鯨と、黒田家旧蔵の志賀島出土の金印（現福岡市立博物館蔵）で、金鯨は二個のうちの一個をウィーン万国博覧会で展示、残りの一個を湯島で展示した。会期ははじめ二〇日間の予定であったが、金印や金鯨を一目見たいという観覧者はひきもきらず、好評に応えて五〇日間に会期の延長を行っている。これによって会場に押しかけた観覧者は実に一五万人近くにのぼった。今日でもこれらの文化財は多くの人々の関心の的であり、金鯨は先般の愛知万博に、金印は九州国立博物館の開館記念展にも出陳されるなど、今も昔も変わらない人気をみせている。

博物館はこうした市民の志向についてど



九州国立博物館の文化交流展示室

ちらかといえは関心を払ってこなかった。学術的、研究的視点中心に対処しようとした傾向にあった。博物館での解説や説明もややもすると学問的で、平易化することの努力を避けるかのようなところが見受けられた。つまり普通の市民が参加する観光という視点が博物館側に欠けていたわけである。

しかし、同じ文化財の世界であっても、博

物館で扱うような絵画、古文書、仏像などのような動産文化財とは別の遺跡や城郭、さらには建造物、寺院、神社のような土地に伴う不動産的な文化財は観光としての大きな枠組みの中にある。とくにこの一〇年ほどは世界遺産登録が文化財の観光化を加速させ、文化財と観光の関係が社会的に定着化したように思える。これからの博物館も文化財を具体的な形で取り扱う場所として、いまや観光を視野に入れた展開を避けるわけにはいかない。

改めて文化財保存のあり方を少しだけ掘り下げてみると、昭和二十五年に制定された現行の文化財保護法を振り返ってみる必要がある。つまり、この制度はなぜ文化財保存法になっていないのか。ということである。

日本の文化財保存の骨子は指定制度で、まず明治三十年の「古社寺保存法」からはじまる。やがて昭和四年には文化財指定の範囲を拡大して「国宝保存法」に改め、またその少し前の大正八年には、遺跡地や天然記念物等の不動産文化財を対象とした「史跡名勝天然記念物保存法」を定めるが、いずれも「保存」の語句を入れた制度となつて

いる。

昭和二十四年、世界最古の木造建築物である法隆寺の金堂壁画の焼損をきっかけに、これらの制度を改正し発展させた現行法では「文化財保護法」とした。「保存」から「保護」への変化である。これは文化財制度の抜本的改革を行うことよって文化国家の建設にふさわしい立法を行うという主旨から取り組まれた。それよって政府、地方公共団体、国民の一致の努力によつて文化財を護っていくという基本的な意図を表示し、文化財の保存のみならず活用の面をも規定する制度としたのに伴い、名称を保護とした経緯がある。つまり、今号のテーマである地元力という視点からも、文化財は保存のみならず観光など活用をすることによつてこそ生かされ、これが地域を支える大きな源泉の一つになるということになる。文化財活用の一つの場が博物館であり、そこには観光という新しい方向づけを加えることが地元力を増す新鮮な取り組みといえないだろうか。ただ手放しでの博物館と観光という構図でなく、博物館として必要な市民との共生を怠つてはいけないことは当然である。

(みわ かろく)



連載 I  
あの町この町  
第19回

# 道徳門と経済門 —— 静岡県・掛川市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀  
(イラスト＝著者)

静岡県の掛川は、これまでも何度か訪れた。最初は遠い昔の学生のころで、森町に行くとき、たしか二俣線と行ったとおもうが、掛川駅で乗り換えた。時間待ちのあいだ、駅前通りから城跡公園まで往復した。旧城下町、遠州掛川五万石を予想していたのだが、往復の道はわりとあつけない町並みだったのを覚えている。

ずっととんで二〇年ばかりのちのことだが、そのころ温泉巡りにこつていて、掛川の倉真温泉へ出かけた。駅からバスで三〇分ばかりかかる山間の一軒宿。以前は「くらま」と読んで、「まっくら」といった意味だとおそわった。それほどまわりにくろろと木が繁っていたそうだ。

宿の戸口に畳表のついた縁台が据ええあつたので、湯上がりにはゴロリと横になっていたら、そのうちうたた寝をしたらし

い。熱い息をあびて目をあけると、耳の垂れた老犬がいて、鼻をグイグイ押しつけてくる。ドイツ語に「眉と眉を寄せ合う」という表現があつて、キスをするこの遠廻しの言い方だが、老犬と眉を寄せ合つても、べつに何てこともない。縁台の下が犬の休み場で、鼻先で専有権を主張したようなのだ。

つまらないことを覚えているものだが、もう一つよく覚えている。町並みが大きく変化していたこと。新幹線駅がつけられるとかで、旧の駅舎が取り壊され、大々的な工事が始まっていた。それが駅前通り一帯に及び、ビルの鉄骨がニヨキニヨキとびている。記憶の専有権を犯された気がして、早々に立ち去った。

そのつぎは、新幹線で来て、新しい駅に降り立った。当時、掛川市は人口八万た

ずながら、全国に知られていた。ヤリ手の市長がつぎつぎと話題性のある町づくりをしていた。新幹線駅の開設をはじめに、東名高速道路の掛川インターチェンジ開業、木造による天守閣の復元、中心市街地再整備……。駅前の鉄骨はジャスコ、ユニーといったスーパーになり、それぞれがビルの壁面に大きな垂れ幕をなびかせている。

地方都市再生のモデルのようにいわれ、つぎつぎと視察団がやってくる。たしか新幹線駅でも、その種のグループといっしょだった。

こちらは視察に赴いたのではなく、二宮金次郎のことで知りたいたいことがあつたせいだった。知る人は少ないが、掛川は二宮尊徳を奉じる人々の本拠地である。尊徳の思想を要約して「報徳」。これを実践するの



大日本報徳社の正面

報徳社で、全国各地にある報徳社を統括するのが、掛川の大日本報徳社。

城の裏手にあたるところに本部の建物と講堂がある。入口の豪壮な石の門に、深々と刻まれていた。

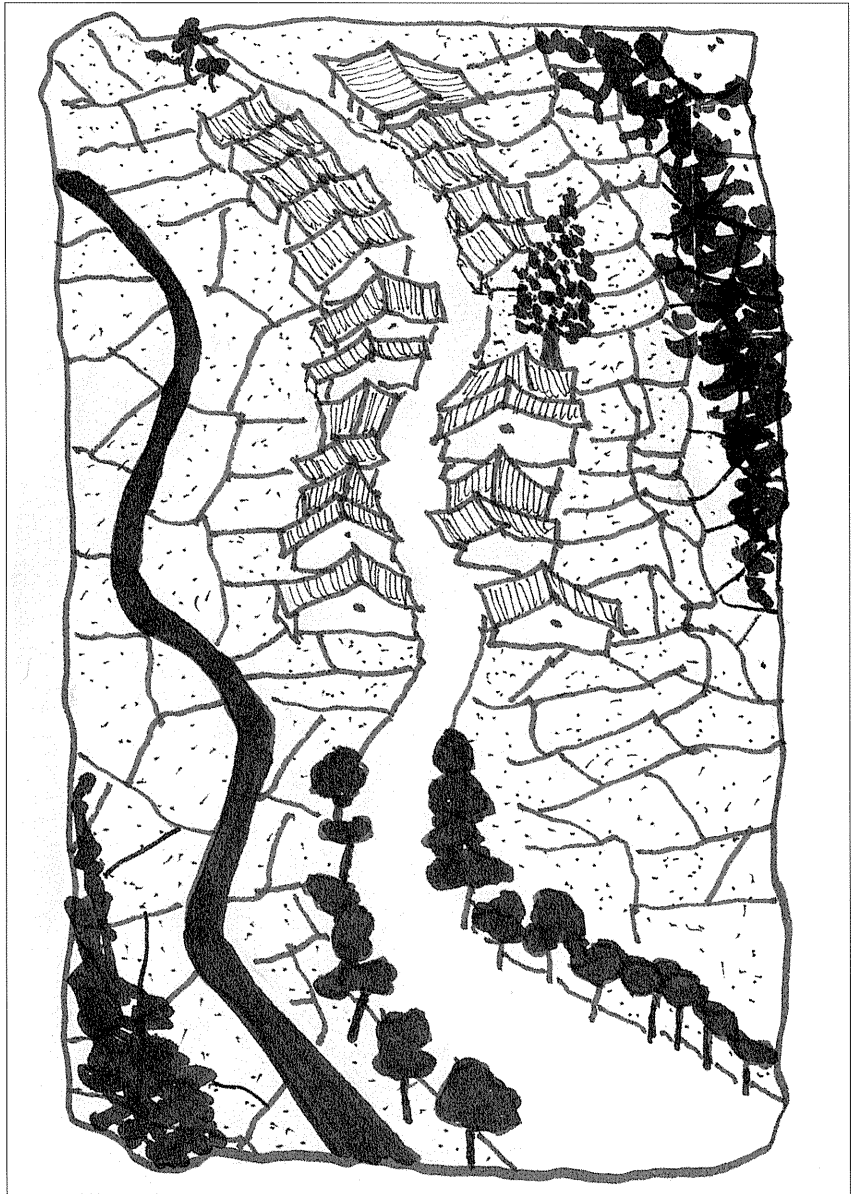
#### 道徳門

#### 経済門

正門の文字が伝えるように、経済活動にあたり、モラルを忘れてはならない。自然の摂理を尊重する。「報徳」は、わが国最初のエコロジー運動でもあって、そこから「倉真」地区に見るような豊かな山林が生まれた。駅にもどって気がついたが、掛川の駅舎も木造りで、駅前的一角におなじみの二宮金次郎像が立っていた。

風の便りに聞いた。町づくりの優等生のはずが、へんな雲行きになっている。中心街が急速にさびれてきた。視察に来る人の用向きがさま変わりして、以前は、いいお手本として勉強に来たが、このところは失敗したケースとして反面教師の役まわり――。

いったい、どういうことだろう？ 首をひねりながら、なじみの駅に降り立った。プラットホームから掛川城が見える。城山の上にプラモデルのようにのっている。大手門も復元された。近くに武家屋敷が移さ



旧東海道掛川宿

れて、「歴史体験エリア」がととのったとも聞いている。何がどうなって反面教師に変わったのか？

駅前前の二つのスーパーは、もぬけのから。一つは正面が開いているが、臨時の催

しで、それも一階の一部のみ。

駅前通りにひとけがない。少し行くと旧東海道とまじわり、通称が連雀通り。歩道はアーケードつきだが、そのアーケードと通りとが、平行線の原理で一点に合わさる

石垣だけの城跡が悠大だった。そこに新しく天守閣ができ、美術館がつくれられ、武家屋敷が復元された。なぜか急に狭くなるしくなった感じで、空間がいちどに縮んだぐあいである。

ところまで見通せる。店の並びのうちの三つに一つはシャッターが下りたぐあいだ、「貸店舗」「テナント募集」の張り札。建物が取り壊されて歯が欠けたようなところもある。ひとけない通りを、ときたま車が走り抜けていく。

旧東海道を横切つて小さな橋を渡ると、城跡公園に入っていく。城が復元される前は「御殿」といって、旧時代の執務に使われていた建物だった。ゆつたりした平屋建てで、



駐車場の隅に観光バスが一台。コースを一巡してきた人たちが、二、三人ずつ連れだつてバスへもどつていく。

大日本報徳社のある辺りは落ち着いた家並みで、その一角に優雅なタイル張りの小振りの洋館がまじつている。かつては報徳思想の勉強会や講習にあてられていたのではなからうか。二宮尊徳の門人・岡田淡山が掛川の倉真生まれで、そのつながりから掛川に大日本報徳社がつくられた。研鑽の場を「道場」といつて、月ごとに「常会」を開いている。

以前に見学に来たとき、そんな説明を受けたが、はたして現在はどうなのだろう。和洋折衷の講堂の大屋根を半ば隠すほど古木が繁り、辺りは静まり返つている。砂利を踏む自分の足音が聞こえるばかり。観光コースに入っているはずだが、ここまで足を運ぶ人は少ないのかもしれない。

ぐるりとひとめぐりして連雀通りにもどつてきた。シャッター街に冬日がさし落ちて、道路の半分が淡いだいだい色。何やらとりとめのない気分である。観光スポットから出てくると、生活の気配がない。市民がいての町であり、現在の暮らしがあつてこそ過去の遺産だと思ふのだが、歴史遺産の外に出ると、真空地帯に迷いこんだ

ようなのだ。

記録によると、ほんの数年間で急速に「真空化」の生じたことがみてとれる。

平成六年（一九九四）

掛川駅前ジャスコ閉店

平成八年（一九九六）

掛川市役所、郊外へ移転

平成九年（一九九七）

掛川駅前ユニー閉店

この前後にはまた、連雀通りにあった静岡銀行と中部銀行の掛川支店が閉鎖され、県立高校が市中から出ていった。行政用語では「中心市街地の空洞化」というのだから、町の中心であるべきところがカラっぽになった。掛川市役所は城と向き合う一等地にあつたわけだから、行政機関そのものが、率先して空洞化に拍車をかけたことになる。

「掛川市中心市街地活性化基本計画」というのがある。平成十一年（一九九九）三月作成。目みえて空洞化が進んでいたなかで、このたびは「活性化」の名のもとに青写真がつくられた。そこには目標が十三項目にわけて掲げてある。駅前のスーパ跡の大きな空洞には、「街づくり核の創出」「大規模空き店舗の活用」、つづく駅前通り

は「街なかシンボル道路の整備」、その裏手には「歩道・路地の再生」をすすめる。

ほかには「交通支援センターの設立」「再開発・共同建築の推進」、城山の下に「水辺環境の形成」。そして「掛川城跡公園の充実」「歴史的建築物の保全・修復」「歴史体験の館の整備」……。

現状に照らし、あらためて計画を見直す、よけいにウソっぽく見えてくる。机上の計画ではきまつて「創出」「再生」「整備」といった言葉が顔を出すものだが、まさにヒナ型そのままであつて、もしかすると請け負いの設計事務所の机の上で生まれたものかもしれない。

私には不審でならないのだが、どうして新幹線駅と城跡を結んだ縦軸だけが活性化の基本になっているのだろうか？ 横軸にあたる連雀通りは、正確には「連雀商店街」「中町商店街」「西町商店街」より成り立っており、ながらく掛川市民の生活に欠かさないゾーンだった。縦軸が歴史文化ラインとすると、こちらは市民の暮らしラインである。縦軸と横軸が組み合わされてはじめて、街の再生が望めるのではなからうか。ことによると「遠州掛川五万石」が錯覚の元凶なのではあるまいか。たしかに城が置かれ、城下町ではあつた。しかし、それ



以上に掛川は東海道の重要な宿場町だった。島田・藤枝・掛川・興津・舞坂……。静岡県下の町々は、おおかたが人と物産の大動脈の拠点として発展した。

『東海道巡覧記』といった江戸時代のガイドブックは掛川について、「川有、城を巡るゆえ掛川と言説有」。つづいて、「葛布、あ

い鮫、さし足袋」といった特産物を述べてる。て、観光スポットの背後に人々の暮らしがしっかりとあってこそ、訪れて楽しいし、愛着が生まれる。目を輝かして歩きたくない。

いる。もっぱら宿場の賑わいを語って、城下のことはほとんど触れていない。宿場町に比べて城下町の形成が、さほどなかったせいにちがいない。数百年にわたり町として機能してきたのは横軸であって、縦軸は新幹線に付随した観光の視点が生み出したものだろう。市民生活とはほとんどかわりがない。

暮らしの重要さは、実のところ町の人だけではない。観光客にとっても同様であつ

それは江戸の旅人も同様だったようで、旅行記の一つは葛布の店、染め物の店、袋物の店といった当時のブランド店を数え上げたあと、町角の本屋にも触れている。小田原、駿府を旅してきたが書物をひさぐ店がなかったのに、当地掛川で一つ見つけた。

「海道はじめての奇観なるべし」

大げさな言い方が、それとなく町歩ききのよろこびぶりを伝えている。

天守閣や美術館や武家屋敷は観光客をよび寄せられるが、市民のくつろげるところではない。旧市役所跡地、図書館、報徳社近辺、城跡公園、それに東海道筋の商業地域がネットワークとして結ばれ、旧城下町と旧宿場町とが一つになったときはじめて、観光客にも町の人も、いこいの場が誕生するのではなからうか。歴史的基盤と暮らしの場とが融合しあって、双方で効果を高め合うにちがいない。

お城に入る通りの左手に小崎葛布工芸があつて、肩に「手織二元」と添えられている。江戸のガイド本が名産の筆頭にあげている葛布。葛のツルを繊維状にして織り上げたもので、町の人は「カップ」というようだ。七〇〇年の伝統をもつ掛川の特産物である。

江戸のころは袴かましもや袴かましものほか、座ぶとんの覆いなどに使われた。一時すたれていたが、その丈夫さ、美しさが再認識され、みごとに現代によりみがえった。カーテン地、ハンドバック、日傘、帽子、帯、ネクタイ、袋物、のれん、テーブルクロス……。

二階が仕事場になっていて、声をかけるで見せてもらえる。カッター、コットンと籽ひを往き来させて織っていく。葛づくりの座ぶとんは一〇〇年たつても、色、つやとも変わらない、手ざわりが絶妙だ。

はじめて知つたのだが、織りにかかるまでに、おそろしく手間がかかる。原料となる葛のツルを採取するのが六月から八月にかけてのこと。ツルは外皮と木質の中心部と内皮できている。それを釜で煮立て、流水にひたし、室むろに寝かせて外皮と木質部を抜き取り、内皮だけにする。きれいに洗って、米のとき汁でさらに仕上げ洗いして天日に干して、ようやく葛芋くずお芋ができる。城山の下の小川が、かつては芋洗いの場だったそうだ。

織るためには繊維を糸にしなくてはならない。縦に細く裂いて、結び合わせ、箸に千鳥に巻きつけて一本の長い糸の束にする。こういった作業のいっさいがすべて手仕事である。

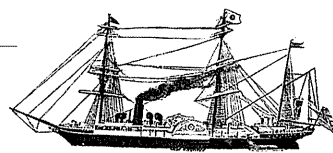
葛布といっても葛だけで織るわけではない。横糸は葛布繊維だが、縦糸は綿糸や絹糸を使う。手ざわり、素朴な感触、自然な上品さ、凛とした美しさ、カップ独得の持ち味は異質の横と縦が合わさつてのことだ。

その美しさを支えているものは、「経済門」よりも「道徳門」の分野であつて、町の再生の手順そのままではないか。ひとときのハデな話題性ではなく、地道な、根気のある工程の点でもまったく同じ。身びいきではないのが、商店街にかつての賑わいを望むのはムリだとしても、「海道はじめての奇観」と声を上げさせるような、個性ある店づくりはできる気がする。

駅前通りの一つ裏手は、昔は紺屋町、とあった。染め職人が住んでいたのだろう。そのの広楽寺という寺に三代目尾上菊五郎の墓がある。当代きつての人氣役者だった。嘉永二年（一八四九）地方巡業中に掛川で病いのために死去。自然石の墓には、「栄松院菊室梅寒墓」とあつて、台石に「音羽屋」と彫られている。

そんな縁で現七代目音羽屋さんにひと肌ぬいでもらうこともできる。なにしろ意味深い道徳門と経済門の二門をもつのは、全国ひろしといえども掛川だけなのだ。

（いけうち おさむ）



連載Ⅱ  
岩倉使節団  
に嵌まって30年  
第4回

# 次々と著作、そして「国際シンポジウム」の開催

ノンフィクション作家  
米欧回覧の会代表

泉 三郎



## 『堂々たる日本人』を出版

岩倉使節団の旅は、マンモスのような素材だけに切り口を変えれば、いろいろな料理ができる。そして私は、一九八四年の最初の本につづき、次々と本を出した。

一九八七年には、政治・経済や宗教・文化などのテーマごとにエッセーをつづつた『新・米欧回覧の記―一世紀をへだてた旅』（ダイヤモンド社）を、一九九三年には『米欧回覧・百二十年の旅―岩倉使節団の足跡を追って』上下二巻（図書出版社）を出した。いずれも本人としては大いに力を入れた本だったが、売れ行きは芳しくなかった。それでは「くだけた面白い本」ということで、一九九四年には旅の失敗談を集めた『異文化遊歩―しくじりも楽し』を図書出版社から刊行した。古来「他人の失敗話ほど面白いものはない」というのが狙いだった

が、またまた空振りに終わってしまった。

ところが、一九九六年十一月に祥伝社から出版した『堂々たる日本人―知られざる岩倉使節団』は、最初から手応えがよく売れ行きも好調だった。そして、一九九七年早々に「出版記念パーティー」が催されることになり二三〇人も人が集まった。その席で斉藤茂太、芳賀徹、川喜田二郎、板垣与一の諸先生らが次々と立って祝辞を述べ、学生時代以来の師、伊藤善市先生（当時、帝京大学教授）はこうエールを送って下さった。

「泉さんは岩倉使節団の旅のほとんどを追体験している、これはスゴイことですよ。暇がなければできないし、金がなくてもできない。しかし、暇と金があっても志がなくてはできません、しかもあのような堂々たる著作にまとめあげるのは能力とファイティングスピリットと、そして愛国心がなければできない！」と。



## 「米欧回覧の会」設立五周年記念

さて、「米欧回覧の会」を設立してから三年が過ぎた一九九九年、二年後の五周年記念には国際シンポジウムをやりたいと思うようになった。

岩倉使節団の研究については北海道大学の田中彰教授が主宰された研究会や立命館大学の西川長夫教授が中心の研究会があり、その報告書も刊行されていた。でも、いずれも国内だけ、しかも学内での規模だった。国際的な研究会はむしろ海外で行われていた。一九九八年には、英国のシェフィールド大学でG・ヒーリー氏主宰の国際的なミーティングが行われ、一九九七年にはブタペストで欧州の日本研究者会議が行われて岩倉使節団がテーマに取り上げられた。

しかし、本家本元の日本で「岩倉使節団」

や『米欧回覧実記』に関する国際シンポジウムはまだ催されていなかった。そこで、われわれの会で二十一世紀の幕開けの年、二〇〇一年に「岩倉使節団」に関する日本初の国際シンポジウムを開催することにしたのだ。

準備期間は二年。まず企画の骨子をつくり芳賀徹先生をはじめ諸先生に相談にのっていただいた。内外の研究者に声を掛けて一堂に集まってもらい、この古今東西の歴史にも珍しい岩倉使節団の研究を、国際的視野で多角的に進めようという意図だった。



130年目に開催された大レセプション



## 一三〇年目の大レセプション

そして企画の進行に随って使節団派遣の一三〇年目にあたることから、この際使節団がお世話になった訪問十二カ国の在日大使館から大使・公使をお招きし、また使節団のご子孫も招いて、大レセプションを開催しようということになった。研究会に先だっての前夜祭よろしく、一三〇年前に各国で展開されたようなパーティーを再現しようというのだ。

在日大使館へのアプローチについては、幹事の藤原宣夫氏の尽力に負うところが大きかった。藤原氏はワールド・パートナーシップ・フォーラムの代表者でもあり、外務省や大使館筋にことのほか強かったからである。

こうして二〇〇一年十一月二十二日夜、日本プレスセンターの一〇階ホールで大レセプションが開催された。そこには、米欧十二カ国の在日大使館からそれぞれの代表と岩倉使節団員のご子孫の方々、同行留学生の子孫の方々、そして会員ほか一五〇名余が集まり、優雅な室内楽の演奏のうちに会は進行した。外国側ではスイス大使が代表で挨拶し、日本側からは岩倉具忠氏が一三〇年前の使節団に対する厚遇にお礼を述べ、和やかな交



## 国際シンポジウム

歓が絵巻物のように繰り広げられた。

本番の国際シンポジウムは、十一月二十三日から二十五日までの三日間、一ツ橋にある学術総合センターで行われた。

米国からは、プリンストン大学のマーチン・コルカット教授、森有礼の研究者でもあるアイヴァン・ホール氏、オクラホマ大学のシドニー・ブラウン教授、英国からは元駐日大使のヒュー・コータッチ氏、欧州からはボン大学のペーター・パンツァー教授、ベルギーからルーヴァンカトリック大学のヴァン・デ・ワラ教授、イタリアからはシルヴァーナ・デ・マイヨさん、そして帰国途上で立ち寄った中国からも銭国紅氏、国内からは芳賀徹氏をはじめ高田誠二氏、西川長夫氏、川勝平太氏ら、会員も含め約二〇名がスピーカーとなった。

また、同時開催でスライド「岩倉使節団の世界一周」のマラソン上映会も行われ、三五〇人の観客が七時間にわたって熱心に鑑賞した。

そして二〇〇三年、これらの記録は、『岩倉使節団の再発見』としてまとめられ、思文閣出版から刊行されることになる。

(いずみ さぶろう)



連載Ⅲ  
ホスピタリティの  
手触り 40

# 「ハウ・アー・ユー」の文化

旅行作家

山口 由美

\*\*\*\*\*  
「ハウ・アー・ユー」と  
\*\*\*\*\*  
日本的なホスピタリティ

本当のところ、英語の「ハウ・アー・ユー (How are you?)」に相当する日本語は存在しないのではないかと、私は思っている。フランス語でいうところの「コマン・タレ・ヴェー (Comment allez-vous?)」、スペイン語の「コモエスタ (?Como esta?)」だ。

英語の教科書や英会話のテキストには「お元気ですか」とか「いきげんいかが」とか、もっともらしく訳されているが、ネイティブの日本人が、このような言葉をやりとりすることは、まずありえない。

昭和天皇崩御の直前、井上陽水が車の窓を開けながら「お元気ですか」というCMがあった、不謹慎だと自粛になったことがあった。あれも「お元気ですか」という台

詞に、現実の挨拶としてはありえない、可笑しみがあつたからこそ不謹慎だったのだ。

それでも「ハウ・アー・ユー」という摩訶不思議な挨拶を、それほど違和感もなく日本人がやり過ごしてしまうのは、英語の教科書で（今はわからないが、少なくとも私が中学生だった頃は）、同時に習う例文が、これまた日常生活では、決して使うことのない「デイス・イズ・ア・ペン (This is a pen)」とか「イズ・デイス・ア・ペン (Is this a pen?)」であるせいかもしれない。教科書で習う英語というのは、所詮、現実の会話ではありえない文章なのだと納得して、通り過ぎてしまふのだろう。

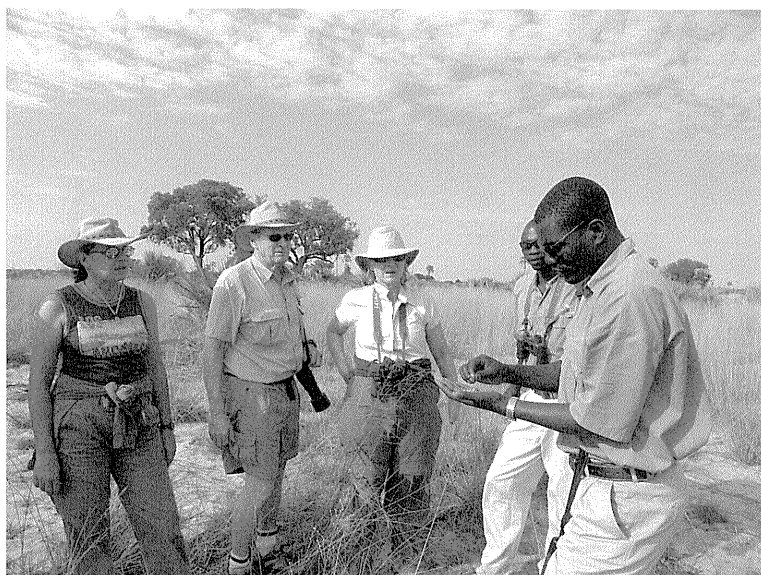
そして、おそらく、ホームステイをするとか、学校や会社に通うとか、何らかの社会単位に入ったとき、英語が（そのほかに多くの外国語が）、「ハウ・アー・ユー」を

多く使用することに気づくのだ。

私が、その事実を改めて気づいたのは、アフリカのサファリロッジでのことだった。過去、取材同行したカメラマンが、一人ならずとも「ハウ・アー・ユー」ノイローゼに陥ったからである。

最近、欧米の旅行雑誌のホテルランキングでも上位に名前があがることが多いアフリカの高級サファリロッジは、一〇室程度の小さな規模で、小規模な高級旅館さながらの手厚いサービスをする。ロッジマネージャーや担当のレンジャー（サファリロッジでは旅館の仲居さんのように同乗するジープ単位で専任のレンジャーがつく）が、朝に晩に、顔をあわせれば「ハウ・アー・ユー」と声をかけるのは、そうしたホスピタリティのあらわれなのだ。もちろん、時間と状況によって、「ハウ・アー・ユー」は、





サファリロッジでは担当レンジャーが自然のガイドのみならず、あらゆる気配りをする

「部屋に何か問題はないか」「今日のサファリはどうだったか」「何か飲み物はいらぬいか」といったバリエーションに変化する。

サファリロッジの朝は早い。動物は、日の出直後の早朝か、日没直前の夕方にしか活発に活動しないからだ。夏ともなれば

（南半球の南部アフリカでは日本の冬が夏になる）、モーニングコールは午前五時。眠い目をこすりながら、ゲームドライブに出かける前の軽い朝食のテーブルにつくことになる。

私も、さすがに早朝ばかりは、返事を返すのを面倒くさく感じることもある。

教科書では「ハウ・アー・ユー？」と尋ねられれば「アイム・ファイン」と答えるのが正解と習う。しかし、現実の生活では、常に「ファイン」とは限らない。眠かったり、不機嫌だったり、体調が悪かったりする。それでもつい「ファイン」と答えようとするから、鬱陶しくなるのかもしれない。

だが、考えてみれば、何か不都合があったときは、「アイム・ナット・ファイン」と答えればいいのである。まあ、そこまで直接的に否定するかどうかはともかく、部屋のクレームなり、自分の身におきた体調不良なりを話すきっかけにすればいいのだ。

そう考えると、なるほど、朝に晩に「ハウ・アー・ユー」と問

いかけるのは、ちょっとした不愉快や不満足をクレームに発展させない仕組みでもあるのかなと思う。

こうしたサファリロッジが、何かと不便なことも多いのに人気が高いのは、自然環境の素晴らしさもさることながら、スタッフが入れ替わりたちかわり、ゲストの顔を見るたびに「ハウ・アー・ユー」と声をかける、そんなホスピタリティのありようが評価されているに違いない。

日本的なホスピタリティとは、直接的にそんなことは聞かず、ゲストの顔色や態度で不満や不愉快を察することである。文化として「ハウ・アー・ユー」の習慣がないから、その感度は、おのずと研ぎ澄まされる。事実、日本のもてなしの真骨頂とは、そうした寡黙な気配りにこそあると思う。

ときどき私は、同行のカメラマンが「ハウ・アー・ユー」ノイローゼに陥ると、冗談めかして「日本語には、ハウ・アー・ユーという挨拶はなく、そういう習慣がない」という話をする。だが、これは冗談ではなく真実なのかもしれない。そうだとするならば、日本のホスピタリティが、今後、世界的に評価を高めていくには、そうした文化の違いを認識することも必要なのではないだろうか。

（やまぐち ゆみ）

# ミャオ族の村で学んだこと — コミュニティに根ざした観光のあり方とは

財団法人日本交通公社主任研究員

黒須 宏志

## はじめに

財団法人日本交通公社では、従来から取り組んできた自主研究活動をさらに充実させていくため、二〇〇六年度から、幾つかの新たな研究テーマを始動させている。そのひとつが、少数民族観光の存立形態などに注目して、コミュニティにおけるツーリズムの望ましいあり方を考えようとするもので、我々はこれを「コミュニティベースツーリズム研究」と呼んでいる。観光人類学、文化人類学の研究者とともに現地視察やデイスカッションを重ね、二〜三年をかけて成果をまとめていこうというものである。

本稿では、この研究の第一回のフィールドワークとして実施した中国・貴州省の少数民族観光の視察について紹介したい。なお、この研究は北海道大学に設置された観光学高等研究センターと連携して推進しているものである。

## 貴州省の概要

貴州省は雲南高原から東に連なる山地の縁にあたる場所にある。高山帯ではないが、面積の八七パーセントが丘陵地で占められ、また雲南の山々にインドシナからの湿潤な風が吹き上がって雲を作るために、年間を通じて雨の多い場所である。経済発展の面でも最も遅れた省のひとつで、統計によれば、住民の平均所得は豊かな沿岸部に比べて十分の一程度の水準に止まっている。

貴州省の人口は約三八五〇万人だが、その四割近く、およそ一四五〇万人が、ミャオ族、トン族、プイ族などの少数民族で構成されている。これらの民族は、中国の長い歴史の中で、絶対多数である漢族などとの競争に敗れ、貴州に移り住んできた人々である。貴州省には、省都・貴陽を取り囲むようにいくつかの民

族自治州が形成されており、その面積は省面積一七万平方キロの半分以上(五五・五パーセント)に及んでいる。

## 貴州省観光の現状

自然や歴史遺産などの観光資源には必ずしも恵まれていない貴州省において、少数民族観光は、文字通り、省の観光の看板となる存在となっている。交通インフラの整備が進んだことも幸いし、この二〜三年、中国国内の観光客は二倍、三倍の勢いで増えている。しかし中国国内客の場合、雲南と貴州をセットで回るパターンが多く、貴州省内の滞在期間は三泊程度である。また国内客にとっては、省内にあるアジア最大級といわれる黄果树滝や、毛沢東の長征ゆかりの地である遵義など、少数民族以外の観光スポットも周遊ルート上に入ってくるため、一般的にアクセスの不便な少数民族の村の観光に

対しては積極的ではないのが現状だ。

一方、海外から少数民族観光を目的に貴州へやってくる旅行者にとってのハイライトは、車で何時間かかろうとも、とにかく少数民族の村々をその足で訪ねることである。このため省内の滞在期間も中国国内客に比べて長い。貴州を訪れる外国人で最も多いのはフランス人だが、彼らは村での民泊を好み、省内での滞在も一〇日から半月程度に及ぶことが少なくないという。日本からの旅行者数はフランスに次いで第二位で、その八割以上が、少数民族の村々を



ミャオ族の村の歓迎風景。地酒の杯を干すことが村に入る者の礼儀である／李刀村にて 撮影者：財団法人日本交通公社・小林英俊

巡る周遊を行っているという。

このように、海外からの観光客と中国国内の旅行者とでは貴州観光に求めるものが大きく異なっている。本稿で中心的に取り上げる少数民族の村々の観光は、これまでのところ、少数民族観光に対しSIT（テーマ旅行・特別目的旅行など）的な関心を持った海外客に多くを負ってきたものと思われる。

### ミャオ族の村で学んだこと

貴州省内には、村を観光客に開放し、踊りや歌を見せたり、土産物を販売したりすること  
で現金収入を得ている場所が数多くある。今回の視察では、それらの中で最も早い時期から

観光客への開放を行ってきたミャオ族の村、  
郎徳上寨を訪ね、それに関わってきたキーマン  
たちから直接話を聞くことが、重要な目的となっていた。郎徳上寨は貴州省の東南部の少数民族自治州の山間地にある戸数二二〇戸、人口約七六〇人の農山村である。省都・貴陽からは約三三〇キロメートル、高速を利用すれば車でおよそ四時間の距離だ。中国で観光が産業として認知されるようになったのは改革開放政策が本格的に動き出した一九八〇年代以降だが、郎徳上寨では一九八五年から観光を始めている。

観光スポットとして知名度が上がつてくると、売店や宿泊施設、公衆トイレなどの、ひと

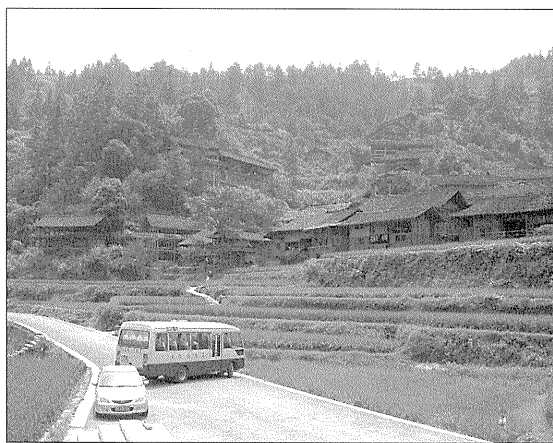
めで観光用と分かる施設ができてくるのが普通だが、この村には、そうした雰囲気建物が見あたらない。例えば、郎徳上寨からも近く、同じミャオ族の村である南花村では、郎徳上寨に似た形で観光客の受け入れを行っているが、ここでは、村の入口付近にツーリスト用の大規模な滞在施設が整備されており、村の広場には売店兼用のツーリストセンターが建てられている。この村はWTOの助言を受けて整備を行ったということだが、ツーリストの利便性は高められている反面で、「観光化」したイメージを受けることも事実である。

実は、郎徳上寨にも、民宿や公衆トイレ、ツーリスト用の食堂などはあるのだが、一般の伝統的の家屋と変わらない建物であるため、違和感が少ないのである。

また、村人が観光や出稼ぎで現金収入を得ると、伝統的な木造家屋をレンガ造りに建て替え、これが景観を破壊するというケースが多い中で、郎徳上寨では、コミュニティの結束力により、そうした弊害が最小限に留められている。近隣の村と比べても、コミュニティとツーリズムとの結婚が最もうまく行っている例では



ミャオ族の女性の民族衣装。貴州産の銀の装飾と刺繍をふんだんに用いた衣装は母から娘へと受け継がれる／郎徳上寨にて 撮影者：小林英俊



山の斜面に形成されるミャオ族の集落／郎徳上寨にて 撮影者：京都嵯峨芸術大学・山村高淑

ないかと思われるのだが、その成功要因は大まかにいうと次のような点にまとめられることができる。

## 収入分配の公平性

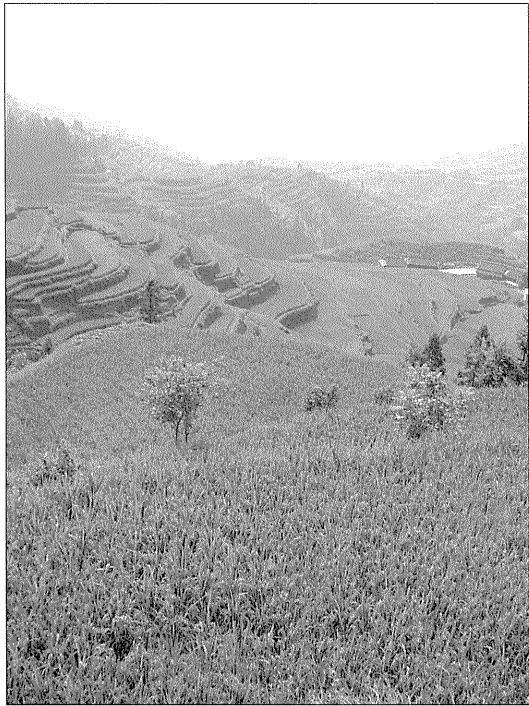
村人にとって観光客を迎えることのメリットとは現金収入を得ることに他ならない。従ってコミュニティの結束を維持しながら観光事業を拡大するには収入分配の公平性が極めて重要となる。このために利用されているのが人民公社時代の成果分配の仕組み「工分」

である。「工分」とは、簡単にいえば労働貢献に対する点数評価のシステムだが、現在の観光事業では、観光客の歓迎やショーでどんな役割を果たしたかによって、獲得できる点数が決まっている。村を訪れる者は、村の入口で杯を干す「しきたり」となっており、これと、広場での歌や踊りによる歓迎とが、村の訪問の基本セットになっている。この歓迎には誰でも参加できるようになっており、民族衣装を身につけて村の広場に出てきて一緒に歌を歌ったりすることで、収入を得ることができ

るのである。訪問客は旅行社を通じて紹介されるグループ客が中心なので、グループ単位の課金が容易である。これも収入分配の仕組みを支える背景となっている。

## 伝統的なコミュニティの力を活用

約四半世紀前、最初に観光を始めた時の波紋は大変なものであった。今回、その当時の村の共産党書記で、村の観光開放を指導した陳正涛氏から直接話を聞く機会に恵まれたが、その当時は観光に反対する人々によって村に支給されるべき肥料が滞り、党書記自らが別ルートで肥料を調達したこともあったという。また、郎徳上寨の村人を説得するのも簡単なことではなかった。村人たちにとっては、観光を始めることで、村が大きく変わり、悪いことが起きるのではないかという不安が大きかったのである。ここで大きな役割を果たしたのが、当時、村の鬼師であった、陳玉輝氏（故人）であった。鬼師とは病やよろず困りごとの相談を引き受けるシャーマンである。ミャオ族の村には必ずひとりの鬼師がいるのだが、陳玉輝氏は、村人の信頼が篤く、精神的なリーダーとして尊敬される存在であった。党書記として観光を推進したいと考えていた陳正涛氏にとっては、この鬼師の



平地が少ないため山地を拓いたスケールの大きな棚田を省内のいたる所で目にする／堂安村付近にて 撮影者：小林英俊

理解と協力は欠くことのできないものであった。鬼師は、時には実際に占いを行い、村人を説得し、動かしていったという。党書記は優れた構想力と決断力を持っていたが、その構想に血液を通わせたのは村のシャーマンであった。

これに似た話を、同じ貴州省内の老漢族の村、天龍屯堡古鎮でも耳にした。天龍古鎮では、公司（株式会社）が主体となって観光事業を行っている。郎徳上寨とは全く異なる方式だが、共通する点は、伝統的なコミュニティの支配力を利用している点だ。天龍古鎮の場合、コミュニティの力は旅游協会（観光協会）という

組織に取り込まれている。この旅游協会の会長は、もと中学校の校長で、定年後に村の党書記を務めた人物である。つまり村の長老として実力のある人を旅游協会の会長に据えることで、公司是村の伝統的コミュニティとの調和を図っているのである。

### コミュニティズム

### （共同体主義）としての観光

郎徳上寨が観光を始めた時、州政府の旅游局はショーを行うチームを編成するよう提案してきたという。しかし党書記であり観光のリーダーであった陳正涛氏はこれを退けた。

「観光は、そのチームに加わる数十人だけのことではなく、村民みなに関係することです。だからみんなで一揃にやろうと言いました。そうすればみな積極的になり、それぞれ利益を得ることが出来ます。そういうことも

郎徳上寨の観光がうまく行った理由のひとつです」

陳氏は当時を振り返って我々にそう語った。その判断のおかげで今日でも郎徳上寨の住民の本業は農業である。村では、一日に引き受ける観光グループの数を二団体までに絞って農作業と観光との両立を図っているという。現金収入を増やすことだけを考えれば農業を捨てて観光に特化した方が稼げるかもしれない。だが、もしそうした道を選択していれば、郎徳上寨のコミュニティの結束力は失われていたのではないかと思う。陳氏の考え方には、原始共産制を観光事業にあてはめたような、素朴で力強いものを感じた。

### 最後に

郎徳上寨での滞在時間は半日程度であったが、事前に先行する研究者たちの論文を読み、話を聞き、それらの知識と、実際の訪問で見聞したことを考え合わせることで、上に述べたような幾つかの仮説を得ることができた。日本とは社会体制もコミュニティの性格も全く異なる村の経験ではあるが、多くのことを学ぶことのできる機会であったと感じている。

（くろす ひろし）

旅の図書館  
新着図書紹介

古くて、狭くて、こりやまた愉快！ 笑顔の老舗「花屋敷」。これは浅草の老舗遊園地「浅草花やしき」のキャッチコピー。各アトラクションのPRもおもしろい。

例えば、ローラーコースター。「最高時速たったの四二キロメートル。昭和二十八年に生まれた日本現在最古のコースターが、銭湯や民家到大突入！ いまにも壊れそうな感じがたまらない！ 日本中で話題の名物コースター」。見世物小屋も、「昔懐かしい、レトロなおもしろキャラが盛りだくさん。冷たい人はお呼びじゃない。ハイトンション、バカウケする人大歓迎！」。

庶民の遊園地として親しまれてきた浅草花やしきは、一五〇年以上前の江戸時代に生まれた植物園をルーツとしている。その浅草花やしきと、それを支えた江戸っ子の奮闘の軌跡を辿ったのが、『江戸っ子と浅草花屋敷——元祖テーマパーク奮闘の軌跡（小沢詠美子著、小学館）』である。

主たる舞台は花屋敷が誕生した幕末から、東京への転換期である明治二十年代までの江戸・東京。輪王寺宮の力を借りて浅草再生に尽力した創業者の植木商・森田六三郎、維新を迎えて花屋敷の運命を委ねられた三代目、新たな経営者となる旧幕臣の婿養子・山本金蔵を中心に、激

動の時代を生き抜いた江戸っ子の心意気と葛藤、それを支えた下町の地域力が浮き彫りにされる。

本書は花屋敷の変遷や下町文化の考察だけではなくどまらない。江戸時代においては、輪王寺宮が統轄する寺のひとつ・寛永寺による浅草寺支配や諸業務の押し付け合い、花屋敷誕生時の町奉行所の困惑にみる江戸幕府の縦割り行政の実態……。明治初期においては、旧政権の否定と脱徳川カラーの動き、揺れ動く新政府の都市政策などにも触れていく。

著者は学者だけに憶測の域を脱しない記述は本意ではないかもしれないが、適度な脱線が歴史好き読者に知的興奮をもたらす。

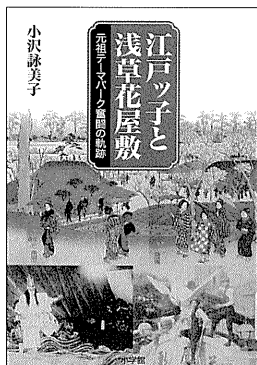
例えば、歌川広重。ご存じのように広重は上洛して「八朔御馬進献」という、幕府から朝廷に馬を献上する儀式の図写をするよう幕命を受ける。そのときの東海道往復の旅が「東海道五拾三次」という作品につながるのだが、なぜ一介の元定火消同心に幕命が下ったのか。そのことを著者は、なんらかの事情（本書では事情に關しても触れている）で広重と輪王寺宮が懇意になっていたら……と推測する。であるならば、輪王寺宮ゆかりの開園まもない花屋敷を広重が描いたのは、錦絵を使って大々的に宣伝していたということになる……。ちなみに本書表紙の錦絵

は、一般公開翌年・輪王寺宮が花屋敷という名称許可を与えたといわれる嘉永六年（一八五三）の広重画「浅草金龍山奥山花屋敷」である。

花屋敷を材料に江戸文化についての論文を書くつもりだった著者の興味は、江戸から明治における花屋敷をめぐる人々の葛藤へと移り変わっていったという。確かに、花屋敷の苦難の道は維新とともに始まった。明治初期の記述がほぼ三分の二を占めることから察しがつく。武士として、植木屋としての誇りを失わなかった三代目。深川の投機的・刹那的生き方を貫きつつ、責任の取り方を心得ていた山本金蔵。その共通点は「いき」と「はり」を本領とすることであった。

読後、「古くて狭い」をウリにしようとして改めて、江戸っ子の懐の深さを感じた。

（中村 功）



四六判 230 ページ  
定価 1,995 円  
小学館

■定期刊行物

- 旅行年報（年更新、毎年九月発行）  
過去一年間の旅行に関する動向と展望をデータ中心に解説。
- 旅行の見通し（年更新、毎年一月発行）  
今年一年間の国内旅行・海外旅行などの量的見通しと質的变化。
- 旅行者動向（年更新、毎年七月発行）  
国内・海外旅行者の意識と行動について実施する当財団「旅行者動向調査」の分析結果をビジュアルに解説。「二〇〇六」では、「団塊ジュニア」「リピーター」「温泉ニーズ」を特集。
- 観光文化（年六回、奇数月二〇日発行）  
旅や観光の文化に関する当財団の機関誌。

■観光読本（二〇〇四年六月発行）

東洋経済新報社の読本シリーズ。一九九四年の初版刊行から一〇年を経て、内容を大きく見直した改訂版。観光全般に関する客観データや現象を解説。またそれらに基づく分析・提言など。

■その他刊行物

- 美しき日本  
日本の美しい観光資源を紹介する写真集。わが国を代表して世界にアピールでき、わが国の基調となる観光資源三九一件を選定し、写真と解説文で紹介。外国語版（英語・中国語・韓国語）「Beautiful Japan」も発行。
  - エコツアーリズム さあ、はじめよう！  
エコツアーリズムを目指すすべての人に向けて環境省が編集し、当財団が発行した手引き書。
  - 実践講座インテーパーリテーション  
インテーパーリター（自然ガイド）実践者のための参考書。
  - 自然ガイドのためのおもしろヒントブック  
自然ガイドツアー・プログラム作りのための素材集。
- ※刊行物に関する問合せ、冊子をお求めになりたい方は  
財団法人日本交通公社 観光文化事業部まで。  
電話：〇三・五二〇八・四七〇四 <http://www.jtb.or.jp>

次号予告

◆今号では「地元力」を特集しましたが、地域の宝をいかに次の世代に伝えていくかも大きな課題となっております。次号の特集は「次世代継承（仮題）」です。

編集室から

●「將軍の子孫、徳川宗家十八代当主恒孝さんつねたか高山を初訪問——幕府ゆかりの陣屋など見学」。これは、昨年十一月二十四日付の岐阜新聞の大きな記事の見出しである。天領となった元禄五年（一六九二）以降、明治に入るまで、飛騨国は勘定奉行の直属配下だった郡代・代官が統治。將軍自らが飛騨国を訪れた記録はなく、文字通り三〇〇年以上の時を経ての初訪問だった。

●將軍の高山入りは、二十四・二十五の両日に開催される「全国街道交流会議 第五回全国大会飛騨高山大会」に出席するため。年一回開催の今回の全国大会には約一三〇〇人が参加。「道」新時代——まちの風格、みちの品格」をテーマに、道文化を地域に生かすための熱い議論が交わされた。同大会では、地域相互の知恵の交換などを目的とした「街道交流首長会」発足に向けて十数名の首長も参加（発起人は二五名）。すでに発起人連名による全国の首長への呼びかけが始まっている。

●道文化の産物といえば、正月恒例の「東京箱根間往復大学駅伝競争」もその一つ。片道一〇〇キロを超す沿道が、あれほどの人で埋めつくされるイベントはそうはない。ここ三年は、OB会として沿道で応援できる我が母校M大学は、五〇回目の出場。復路の平塚中継所までは久しぶりに熾烈なシード権争いを演じたが、結果は一六位。第八三回大会の優勝を飾ったのは、奇しくも同出場回数の順天堂大学だった。（W・S）

編集後記

◆新年あけましておめでとうございます。本年もまた、変わらぬご支援、ご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

◆昨年十二月、長年の悲願でありました「観光立国推進基本法」が成立致しました。観光が日本においても二十一世紀における重要な国策として明確に位置づけられました。今後そのマスタープランとして「観光立国推進基本計画」が策定されますが、施策の基本理念として「地域における創意工夫を生かした主体的な取り組みの尊重と、住民が誇りと愛着の持てる地域社会の持続可能な発展を通じた観光の促進」を掲げています。地域が本来有しているその価値に目覚め、地力を引き出すことができるかその真価が問われます。

◆本号では地元力とは何か、その分析と各地での取り組み事例を紹介させていただきました。いずれも住民の主体性が如何なく発揮され成果を上げています。各地で地域の歴史・風土・環境に根ざした、住民が主人公の個性豊かなまちおこし・まちづくりが進展するよう願って止みません。

◆「風致探訪」は今年、各地の風物詩を取り上げます。ちなみに本年、表紙を飾るのは樋口氏撮影の、霞ヶ浦の夏を彩る「帆曳船」です。（宇八）





## 観光文化 第181号

第31卷1号通巻第181号

発行日 2007年1月20日



発行所：財団法人 日本交通公社

東京都千代田区丸の内1-8-2

第1鉄鋼ビル

〒100-0005 ☎ 03-5208-4701

<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内1-8-2

第2鉄鋼ビル 旅の図書館内

〒100-0005 ☎ 03-3214-6051

<http://library.jtb.or.jp>

編集人：外川宇八

発行人：新倉武一



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554